

# ピッポ新聞

2009

1

No.239

子どもの本専門店

## ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤倭男

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

したときに足が痺れた経験はだれもおもちだと思えますが、あの痺れが指の先つちよにまだまだに持続しているというだけなのですがね。ように大したことは無いのです。冬の山へも出かけるようになって二十年以上経ちますが、こんなことは初めての事です。その原因もいたって単純なことで、自分でもわかっているのです。でも、今回はそのことを話したくて、八ガ岳山行を語りますね。(いつも変わり映えしませんが)



2009 年元旦午前 6 時 58 分中山峠 (2410 米) 奥秩父山系から登った初日の出

元旦に八ガ岳山行から戻って十日ばかり過ぎたというのに、いまだ多くの指先は、右手 3 本と左手 2 本が痺れています。軽い凍傷を負ってしまったのです。正確には右手の小指・薬指・中指、左手は薬指と中指です。症状はといえば、不慣れた正座を

### 八ガ岳山行

### 天気晴朗なれど

### 軽度の凍傷を負う！

### 変化した登山スタイル

ほとくの冬山は年々軟弱になっていきます。ほとんどが単独ですから、最近では体力的にテントなどを背負って奥まで出かけることができなくなっしまいました。当然、登山スタイルは変わってきました。まずはアプローチ(登山口まで)の方法も変わりました。夜中に車でのアプローチが普通だったが、新宿からの夜行列車に変わり、さらにここ数年は昼間の列車にかえて、場合によっては登山口の最寄りの駅近くに一泊したり、あるいは麓の山小屋に泊まり、翌日から山に入ることが多くなりました。

テントを持たないから、冬は山小屋が開いている山系しか行けません。その手頃な場所が八ヶ岳というわけです。その八ガ岳山行も年々軟弱になっていくのです。美濃度からの入山がほとんどだったのに、一昨年、去年、今年と夏沢鉱泉からの入山です。予約しておく茅野駅まで車で迎えに来てくれて、途中雪上車(?)に乗り換えて、標高 2 千㍎ぐらにある夏沢鉱泉まで歩かず運んでくれます。

美濃度口からだ、最低でも小屋のある赤岳鉱泉まで林道と雪の樹林帯を 3 時間半位は歩かなければなりません。十年ぐらい前までは、夜行で茅野まで行き一番バスで美濃度まで行き、その日に赤岳鉱泉経由で硫黄岳小屋あるいは赤岳頂上小屋まで登っていたことを思えば、その墮落ぶりがおわかりいただけると思います。

しかも今回は、去年までと違って、北八を目指したのです。(11 ページへ続く)

# ピアンキの名作『くちばし』 二つの版の謎をとく

## 第七回

” なぞなぞが伝える、  
人と自然のつながり ”

動物学者 今泉吉晴

### カラスに学ぶ

前回は『どうぐはなくても』の冒頭の一節と、扉ページの絵を見ました(ピッポ新聞2008年11月号)。若干の検討から、田中氏がピアンキの作品を二つの要点で改変している、とわかりました。すなわち、  
1 ロシアの古典的なぞなぞを削除して質問にかえる。  
2 キーワード「斧」を「道具」に置き換える。  
3 主人公「ぼく」の削除、です。これら3点の改変は作品を根本から変えるでしょう。ピアンキの名作がこれらの改変にたえられるとは、考えにくいことです。

以後の検討では、『どうぐはなくても』がピアンキの原作からどれほど離れた作品になっているかを見極めることになり、また、改変の影響は作品の隅々におよんでい

て、大仕事で長くなります。何しろ、冒頭の一節で原文どおりのフレーズは「鳥の巣です」だけなのです。そこで、先行きにおおよその見通しをもっておいた方がいいでしょう。

幸か不幸か、『どうぐはなくても』(V:ピアンキ原作、田中友子文、N・チャールシナ絵、2007年4月刊行)は科学絵本です。改変が絵に表現されています。裏表紙に描かれたワシの巣の絵は、改変を総括した絵でもあるでしょう。この絵が奇異であることは、前回みた扉ページの絵の比ではありません。

ピアンキの原作、Master Bez Topora II 『斧を持たない匠』は、主人公である「ぼく」が、鳥の巣づくりの労苦をへらしてあげたいと、斧を手に鳥のもとを訪れ、使ってもらおうとする旅が筋です。多くの鳥が斧はいらないよ、といっています。

ところが、最後に訪れたワシが斧をみて巣材になると判断します。長い柄を木の太枝に見立てたからです。ワシは「ぼく」に、斧を巣に投げ上げておくれ、といいます。つまり、斧を道具として見たのではなく、巣材として見ました(ワシという動物に固有の巣材に対する好み、価値観を明らかにしています)。物語はそこで終わり、「ぼく」が斧を投げあげたかどうかは読者の想像にまかされます。

斧が道具に置き換えられた『どうぐはなくても』では、ワシは道具をみたでしょう(原作では「ぼく」がワシのもとを訪れますが、『どうぐはなくても』では訪れた

のはピアンキらしき人という設定です)。では、ワシは道具に巣材としての価値をみたでしょうか。それはどんな形状の道具かによります。

ところが裏表紙の絵から判断すると、田中氏はすべての道具をワシが巣材にしているように思っています。しかも、ピアンキらしき人が、それらの道具を投げ上げたとき、立ち入った解釈をしました。鋸(のこぎり)、鉋(かんな)をはじめ、かけや、ボールなど実にさまざまな大工道具が描き込まれています。鉋、かけやなど、重くごろごろする物は、巣が揺れると他の巣材を押しつけて慣性で動き、巣を弱くした上、落ちて巣に穴を開けるので巣材に向きません。

ピアンキらしき人は、多量の道具をもつとせざるに背負い込み、山野を走り回る超人のようです。でも、家を建てるための道具をすべて背負い込むのは不可能です。かけやが描き込まれていますが、重いかけやを高い木の上のワシの巣に投げ上げるとは驚きです。『どうぐはなくても』は多くの疑問をかかえた物語です。巣のあちこちに危険な刃物が差し込まれています。これほど鳥のひなにやさしくない巣を描いた絵を、私は初めて見ました。

このように、一枚の絵にいくつもの疑問が集約されて描き込まれているのは、要は軽率な3点の改変ゆえです。福音館書店の責任も問われます。日本の出版社が根本から変えてしまったこのような作品をロシアの絵本といえるのか、疑問がでて当たり前でしょう。



『どうぐはなくても』裏表紙のワシの巣の絵（部分） 風が吹くと木は揺れるでしょう。重い大工道具がこの位置で安定し、巣を強固にしているとは、あり得ません。

込んで歩いてどうなるでしょう。カラスが道具に関心を示す可能性があるでしょうか。裏表紙の絵のワシのように何もかも受け入れるはずがないのは明らかです。もちろん、本来のワシも同じことで、裏表紙の絵の道具の描き込みの多くは生物学的にも物理学的にも間違いです。ピアンキの意図にそわない絵であって直ちに描きかえなければなりません。田中氏の意図をくんで描かれたのであって、本文も撤回しなければならぬ内容であろう、と容易に予測できます。

## 木の文化の国、ロシアの物語

ロシアは真つすぐ伸びる針葉樹の森にめぐまれた木の文化の国です。ロバート・ウォーレスの「ロシアの興隆」(Rise of Russia, Time-Life Books, 1968)に、こう書かれています。

「北ロシアはオネガ湖のキジ島に、1714年に完成したキジ教会はおそらく、ロシア人が造ったもっとも複雑なつくりの巨大な木造建築物です。ところが、他のロシアの優れた木造建築物の多くと同じように、びつくりするほど素朴な工法で造られています。……すぐれた技の大工が木材の端を刻んで、互いに組みあわせ、積み重ねて建てていて、金属の留め具類はもろろんのこと釘一本さえ使っていません。そして、何よりユニークなのはこれら建築物の基本的な構造のすべてを造り上げるのに使った道具が斧だけであることです。」

北アメリカの開拓者の簡素な丸太小屋が斧一丁で造られたことは、よく知られていますが、ロシアでは巨大なタマネギのような丸い尖塔で知られるキジ教会すら、斧使いの名手である大工の斧によって造られました。

田中氏の『どうぐはなくても』の原題、Master Bez Topora (『斧を持たない匠』)にある斧とは、右の文章のような意味での使いこなされた斧であり、また匠とは斧使いに秀でた大工であることはいまでもありません。

前回は作品のほんの一部をみたにすぎませんが、田中氏が原作を大きく改変していることは明らかでした。どのような改変か、その性格を見事にあらわしていたのは、扉ページの絵でした。丸太小屋風の家をとりまいて多数の大工道具が描きこまれ、釘やかすがいまで描きそえてあるのが、紙面の縮小コピーでもわかります(前出ピツポ新聞11月号、P.12)。まことに奇異な絵で、これほどロシアの伝統的な木造建築の工法を無視した、ピアンキの原作『斧を持たない匠』にそぐわない絵は他に描こうにも描けないでしょう。

しかし、右に検討した裏表紙の絵と同じく、画家が自らの着想で描いたのではなく、田中氏の文章にあわせて描いたゆえであるのは明らかです。ことは画家の名誉にもかかわります。福音館書店と田中氏は、ロシア語原文を読んでいる画家がなぜ、このような絵を描くことになったのか、制作の経緯を明らかにすべきです。

では、裏表紙の絵を最終的にどう評価するか。ワシをカラスに置き換えて私たちのすぐ近くの町中の自然に問うてみれば、すぐに価値ある示唆が得られます。冬はカラスの巣を見るいい機会です。葉を落とした街路樹などの枝上に古巣が見えています。針金製のハンガーを大量に組み込んだ巣が多いことに驚かされるでしょう。カラスもまた、ハンガーの道具としての機能に意味を見るのではなく、細枝に見立てて巣材としての価値をみました。そこで原作の主人公「ぼく」にならって、ハンガーはいりませんか、カラスのもとを訪れたら、巣づくりを手伝えたかもしれません。でも『どうぐはなくても』のように、(ハンガーでは子どもにわかりにくい)、道具はいりませんかしよう、とってスパーマンのごとくたくさんさんの道具を背負い

以上のとおり、扉ページと裏表紙の2点の絵に集約される物語の改変の様相は、変更がビアンキ作品を大きくそこなうものであることをあらわしています。

「著作者は、その著作物及びその題号の同一性を保持する権利を有し、その意に反してこれらの変更、削除その他の改変を受けないものとする（20条）」とある著作権法の規定を待つまでもなく、無責任な作品の改変は著者と読者に対する裏切りです。

『斧を持たない匠』の変更について、まず考慮に入れておくべきことは、田中氏が前二作（『おしゃべりなもり』と『くちばし』）どれが一番りっぱ？』では訳者であったのに（訳者であることは絵本の表紙に「ビアンキ・ぶん 田中友子・やく」と表記されています）、『どくろはなくても』では「ビアンキ・原作 田中友子・文」と表記されていることです。

もし、この物語でも田中氏が訳者なら、物語の筋に矛盾するような記述があれば、それは誤訳ではないかと指摘し、改正するよう求めることもできます。しかし、「訳」ではなくて「文」とは何でしょう。「ビアンキ・原作」と並べて書かれた「文」ですから、訳の一種であつてなおかつ「訳」ではない、という意味なのでしょう。考えても字面からでは理解不能で矛盾する表示です。

このような「文」のわかりにくさについて、伊藤倭男氏は絵本の表紙に記される表記について多くの事例をあげて論じた上で、『どくろはなくても』を取り上げています。

そして、「v・ビアンキ原作 田中友子 文」の「文」とは、「ビアンキの物語の再話、再創造、翻案、抄訳のどれでもあり得る、専門家でもないのに改変することは科学絵本として無責任」と批判しました（『B級の本の話、あれこれ』、ピッポ新聞2007年6月号）。

「文」の実態の核心をついた批評です。もし、原作に本当に手を入れる必要があるなら、その目的を適切に表現する再話なり翻案なりといった用語を使つたらいいでしょう。「文」とは、そのいずれでもあつても問われない、原則を欠いた改作ではないか、特に科学絵本の翻訳の姿勢として許しがた、という指摘です。実際、「文」の書き手を、あるいは「文」の文章をどう呼べばいいのか、適当な呼び名さえありません。

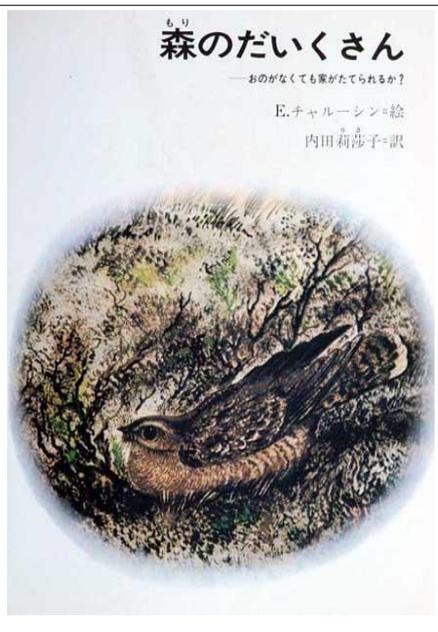
以下の議論では、「文」の書き手は、煩雑で不便なこともあります。田中氏と呼ぶほかにないことになり、「文」の文章はそのまま「文」の文章と呼ぶことにします。

すでに1950年に書かれた岩波少年文庫の発刊の言葉にこうあります。「……出版部門のなかで、この部門（外国児童文学の名作の刊行）ほど杜撰な翻訳が看過され、ほしいままの改作が横行している部門はない。「この批判は事実上、「文」の文章に対するものであつて、根は深いと見ねばなりません。」

## 「文」作品を批評するには

以上のようなあいまいさを特徴とする「文」の文章ですので、得るとは失うことと、じっくり腰をすえて批評していくことになりま。

田中氏がビアンキの作品からなぞなぞを削除し、質問に置き換えれば、読者はその分、田中氏の文章を読むことになり、ビアンキの文章を読めません。物語のあらゆる部分と呼応し合っていたなぞなぞの働きも読み取れなくなり、その代わり田中氏がつけ加えた質問が新たにつくる関係を読まざるをえません。つまり「ビアンキ・原作 田中友子・文」とは、矛盾です。田中氏が働けば働くほど「ビアンキ・原作」の意味が薄れます。「ビアンキ・原作」とはいえない恐れができてきても当然です。



『森のだいくさん』扉の絵  
この訳本の末尾に、「この世界と自分の言葉で語り合うことができるのは、小さな子どもたちだけです」とビアンキの言葉がそえられています。

そこで、私がまずしたらよいことはくり返しになりますが、ビアンキの原作から

『どうぐはなくても』がどれほど離れた位置にあるかを明らかにすること、すなわち、「文」の実態を見えるようにすることです。幸い、この物語には内田莉莎子氏による

先訳『森のだいくさん……おのがなくとも家がたてられるか?』があります(『絵本「ピアンキ動物記」、1973年、理論社 に集録 E・チャールシン 絵)。内田氏の訳文と田中氏の「文」を読み比べることで、誰もがそれぞれに「文」の文章がどんな位置にあるかを見定めることができ、それは重要な貢献になります。

前回検討したのは、扉ページの絵と、以下の物語の冒頭の文章でした。「かなづちのこぎり かなな のみ。いえを たてるときには どうぐを つかいます。でも どうぐを つかわないで たてられた いえも あるんです。どんな いえでしよう? こたえは とりのすです」。

この文章で原文のとおりであるフレーズは「とりのすです」だけです(ピアンキの原文の訳文は、この後の「原作と『文』」の文章の読み比べ」にあります)。田中氏はこの冒頭の短い文章で、すでに見たとおり、ピアンキの物語に少なくとも三つの大きな変更を加えています。どんな変更であったか整理しておき、それを念頭に先に進むことにします。

1 ロシアの森の文化を代表する古いなぞなぞ『手を使わず、オノも使わずにたてる小さなおうちつて、なあに?』を改造して単なる質問にしました。それもなぜか、ヒントでもあり、答えを限定する条件であ

る「手も使わず」という言葉を削除して「道具を使わないでたてられた家もあるんです。どんな家でしょう」と、茫漠とした問いに変えました。

すぐに続けて、「(答えは)鳥の巣です」と、初めて原文に忠実な訳にもどつたもの手遅れです。「手を使わず」という限定条件がなくては、答えはキツネの巣穴でもリスの枝上の巣でも八チの巣でもよく、鳥の巣とはかぎりません。「答えは、鳥の巣です」ではもれてしまうものの方がはるかに多くて正解とはいえないでしょう。「動物の巣です」がより正しい答えになります。

ところが、「動物の巣」では、質問の答えより後の物語が成り立たないのであって、田中氏の改変は物語の冒頭で破綻しています。

2 斧というキーワードを「道具」で置き換えました。書き出しの文章で、金槌、鋸、鉋、鑿と大工道具を例示しているのとおり、斧と道具とは意味内容がまるで違います。ピアンキは科学的な観察にもとづく動物物語を書いてるのであって、網の目のように交わる無数の論理を描き込んでいます。言葉の置き換えが物語の運びに齟齬をきたすこと必定です。

3 もっとも大きな変更は、なぞなぞをきつかけに鳥に深い関心をよせる、子ども心の代表といふべき物語の主人公「ぼく」の削除です。いったい世界のどこをさがしたら主人公の削除を正当化できる文学論が存在するのか、私たちは田中氏と福音館書店に問わねばなりません。

主人公「ぼく」は、鳥の巣づくりの労苦を軽減してあげたい、という夢と希望をもつことができた鳥好きの子ども心の代表です。その「ぼく」を削除するとは、子どもとの夢と関心を知りたい気持が田中氏と福音館書店になかったのでしょうか。それに何より、ピアンキと作品を信頼していないゆえでしょう。

## 原作と「文」の文章の読み比べ

私の試訳によるピアンキの原作と田中氏の「文」の文章を照らし合わせて、両者の関係を見ていきます。冒頭の一節はすでに見ていますが、物語の全体との関連は検討していません。そこで、改めて冒頭の一節から入ります。冒頭の一節はなぞなぞの問いかけを契機に鳥の巣に関心を向けた「ぼく」の心の動きを描いて、読者に生氣あふれる主人公を紹介しつつ、読者にもなぞなぞを問いかけています。

### 冒頭の一節 私を試訳

手を使わず、オノも使わずにたてる小さなおうちつて、なあに?

ぼくはなぞなぞをだされました。

うーん…… えっ そうか。なるほど「鳥の巣」ね

### 冒頭の一節 田中氏の「文」

かなづち のこぎり かなな のみ。い

えを たてるときには どうぐをつかいます。でも どうぐをつかわないでたてられた いえもあるんです。どんないえでしょう？ こたえは とりのすです。

## なぞなぞは民衆の知恵

原作の冒頭の一節でビアンキが引用したなぞなぞは、福音館書店が刊行した絵本『なぞなぞ100このほん』（M・プラウトフ・採集／松谷さやか 編・訳、1994年）に掲載されたロシアの古典的ななぞなぞであることはすでにお伝えしました（ピツポ新聞2008年11月号、p.13）。

このなぞなぞに答えようとする人はまず、「手とオノでたてるおうち」とはどんなものか、思い起こそうとしましょう。丸太を積み重ねてつくる丸太小屋が浮かんできます。その上で、では丸太小屋のようの手を使わず、斧も使わないでたてる小さなおうちとは何か、と考えを進めます。

手を使わないのだから鳥のことかな、となり、小さなおうちというのだから鳥の巣が答えかな、となります。つまりこのなぞなぞは人間がつくるもつとも簡素な家の一つである丸太小屋と鳥の巣との近い関係を伝えていきます。

私は子どもの自然（鳥の巣）への関心が民衆の自然認識の結晶であるなぞなぞによって開かれる、というビアンキの着想にひかれます。「手を使わず、オノも使わずにたてる小さなおうち」というフレーズは、主人公「ぼく」の心にしまい込まれ（また読

者の心にしみ込んで）、鳥たちとの出会いの場面でいつも思い起こされるでしょう。

それに「手を使わず」と「オノも使わず」がそれぞれに含蓄のあるフレーズです。私たちは飛び立つ鳥を見て、翼の素晴らしさに目を見張りますが、同時に手（前肢）が翼に変わっていることの不可思議に感じ入ります。そこで、鳥が翼をまねに手のように使う姿に感動したりするのです。「手を使わず」というフレーズは、手の動物である人間が鳥に見える視線を感じさせる価値あるフレーズです。

「オノも使わず」には、ロシアの匠、アメリカの開拓者が建てるもつとも簡素な家である丸太小屋に必要な最小限の道具さえ使わない、というイメージがあり、ビアンキはそこに道具をめぐる人と動物との接点を見ています。

『だれのくちばしがもつといいか』でキツツキが「（私は）大工仕事や木工仕事の道具を全て……持っている」と述べたのは、自分には斧よりまさるくちばしという生きた道具がある、という意味でした。すなわち、先に引用したウオーレスの言葉にあるとおり、キジ教会を斧だけで建てたといっても、それは基本的な構造の全てに限られるのであって、窓枠などの装飾や内装の細部は別です。それらは建具師や指物師が使う細密な木工工具によっています。

キツツキは生きた道具であるくちばしは、斧の働きはもちろんのこと、建具師や指物師の木工工具による細工にあたる作業をふくむあらゆる家づくりの仕事をできる、と

語ったのです。そして、これから見る『斧を持たない匠』のキツツキの項で、再び斧と自分の生きた道具について語ります。

このように冒頭の一節の数行の文章が、なぞなぞのフレーズとあいまってビアンキの鳥のくちばしの見方を伝えており、またビアンキの人と動物の道具論を背景に持っています。そうであってこそ読者は、物語の主人公「ぼく」がなぞなぞにふと好奇心を動かされ、答えが「鳥の巣」であることにひとまず納得すると同時に、その答えが本当に確かといえるか、自分の目でしかと鳥の巣を見て根拠をさぐってみたくなった、とわかります。

理屈ではわかってても本当には自分のものになつていない知識、それは何が欠けているためなのか、何を確かめたかったかは実際にみることでわかってくるのであって、つぎの一節で明らかにされると期待できません。すなわち「ぼく」はもともと自然と鳥が好きだったでしょうが、何をどう見たらいいか内面の問いを持つようになっていってしまった。それがなぞなぞが伝える広い関連（人の丸太小屋と鳥の巣に近い関係がある）に動かされて、鳥の巣を改めて注視することの意義に気づきました。自然を見る目を持ったということですが、直ちに行動に移りたくなくて当然です。

## 関連を断ち切る言い換え

なぞなぞを質問に変え、主人公を省いた田中氏の冒頭の「文」は、無味乾燥ではあつ

てもビアンキの原文からエッセンスを抜き出し、簡潔に「鳥の巣」という答えを導きだしているように見えます。が、斧を道具に置き換えるという愚策がすでに致命的です。さまざまな大工道具を駆使して建てる家のイメージはごく普通の家にならざるを得ず、たとえ絵を丸太小屋風にしてもおもしろい今風の住居です。それでは人がつくるもつともシンプルな家の一つである丸太小屋と鳥の巣との近い関係を暗示できません。

「オノも使わず」というフレーズを「道具を使わないで」としてしまつては、鳥のくちばしを道具といっているビアンキの道具の概念と齟齬をきたします。

それに、すでに指摘したとおり、田中氏は「手を使わず」という、なぞなぞの答えの範囲をしぼりこむフレーズを削除し、「鳥の巣」が適切な答えになりえない質問に変えており、読者は答えをおかしく思うでしょう。

それにしても、主人公である「ぼく」を消してしまつたという、いくら「文」の文章とはいえあり得ない改変です。田中氏の「文」からは主人公の問いが鳥との出会いを通して深まつて行く経緯がことごとく消えました。主人公に代わつて著者ビアンキの語りが物語をリードする形になつていくようですが、説明口調でビアンキの限りない好奇心の痕跡も見あたらず、主人公の代役になつていません。

この冒頭の一節では、「ぼく」がなぞなぞに窮し、答えのヒントか答えそのものを

聞いて、はつと「鳥の巣」という答えにとびつく様子が消えましたが、ビアンキ自身が物語をリードしながらの説明では、もともと語り得ない事柄であるのは明らかで、田中氏はビアンキが表現していることを無視したことになります（おそらく田中氏は無視したというより理解できなかったのでしょう）。そのため質問の答えは「こたえは、とりのすです」と、答案の答えのように脈絡なく告げられています。

続くカササギの項では、主人公は身近にあった鳥の巣に目を向けて、具体的にどこかの何が、丸太小屋と同じつくりであるかを検証します。主人公の目が鳥の巣のどんなところ（特徴）にひきつけられたか、そして気持ちにどんな変化が生まれたかが語られます。

### カササギの項

### 私の試訳

そこで、カササギの巣をみて見ました。たしかに丸太小屋と同じように、木のしつかりした小枝で、全体を組んであります。床は土でかため、かわいた草がしいてあり、入り口は正面にあつて、細枝を重ねた屋根もついています。

これを家ではないと誰にいえるでしょう。まちがいなく小さなおうちです。

でも、カササギは斧にふれたことさえないでしょう。ぼくは鳥が気の毒になりました。手を使わず、斧も使わずに家を建てるなんて、たいへんどころではありません。ぼく

は何をしてあげたらいいか、鳥を楽にしてあげる方法はないか考えました。手をあげたいけど、それはムリです。斧なら使ってもらえるかもしれせん。ぼくは斧をとりだして、鳥がすむ野原へ走りました。

### カササギの項

### 田中氏の「文」

ほら カササギのすが そうでしょう？  
まるたごやを つくるように かねえだ  
を くんで つくつた いえです。ちよつ  
と いえのなかを のぞいてみましょう。

いえのまんなかには いろいろちがひ あり  
かには ざつと わらうが しかれています。

なかなか りっぱな いえですね。

カササギは このいえを つくるのに  
い

ちども どうぐを つかいませんでした。

どうぐを つかわないで いえを つくる  
なんて きつと たいへんな ことでは  
う。

どうぐが あれば ずっと らくなのでは  
ないかしら？ いろいろな とりたちに  
きいてみましょう。

### 問いの誕生。なぜ、どうして

なぞなぞに挑んで、その答えにはつとせられた「ぼく」の身近にカササギの巣がありました。「ぼく」は鳥の巣のどこをどうみたらいいのかわからない、自分でもわかっていないわけではないでしょう。でも見たくなり、

なぞなぞのフレーズに導かれて目が自然に巢の小枝にいきました。

太めのしつかりした小枝でまさに（釘を使っていない）丸太小屋と同じように互いに組み合せて巢の形をつくっていました。「ぼく」は確かになぞなぞのいうとおりと思いい、ついで床をみると板張りなどではなく、土間であってやはり丸太小屋と同じと感動しました。

入り口は正面に一つだけ、細めの枝を重ねた屋根もあり、それらについても丸太小屋にも照応する部分がある、とわかり、これは素晴らしい、いよいよ間違いない、と確信しました。そこで、「（鳥の巢は）まちがいなく小さなおうちです」と言い切ることができました。

つまり、なぞなぞが伝えていることは正しいと、自分の目で見た根拠で検証し、わかった手応えがありました。人間がつくるもつともシンプルな家である丸太小屋と鳥の巢は近い関係にある、という新たな仮説をもてたのです。

この検証と仮説の自然な成立は、似た者どうしの一致点を見て関係を知っていく手法によつています。私も小学生のころ確かな手応えが好きたったことを思い出します。例えば、オタマジャクシに後足、前足の順で何日もかけて足が生えてくるのを見るのは、たとえどれほどゆっくりであっても、確かにカエルの子だとわかる興奮がありました（私は「オタマジャクシは蛙の子」・やがて手が出る、足が出る」のフレーズに触発されていたのでしよう）。子ども

だったからこそ、興奮するほどの手応えだったのだと思います。つまり、この物語の中で子どもの読者には魅力ある部分の一つです。

換言すれば、自分の問いに、言葉による答えではなく、自然が直接答えてくれたというわけで、それがわかった手応えの元だといえます。するとまた自然に、「ぼく」の心に見えてきたことがありました。「手を使わず、オノも使わずに家を建てる」のは大変なのではないか、鳥の労苦の程が急に感じられるよつで、「ぼくは鳥が気の毒になつたのです。いても立つてもいられず、手は無理でも斧なら使ってもらえるかもしれない」と「ぼく」は斧を手に、鳥が巣づくりをしている野原へと走り出しました。

エマソンは著書『自然』（1836年）の中で、自然の呼びかけにたえずこたえていくことが生涯の鍛錬といい、「すべては『実際のな手』をつくるため……『どれほどよい考えも、実行しなければ夢と同じ』を学ぶためです」と書いています。「ぼく」はすでに自然と鳥が好きで、思いつきは何でも実行してみる習慣を身につけていたでしょう。新たな問いと仮説、それにしたいことができ、大いに張り切っている様子が伝わってきます。

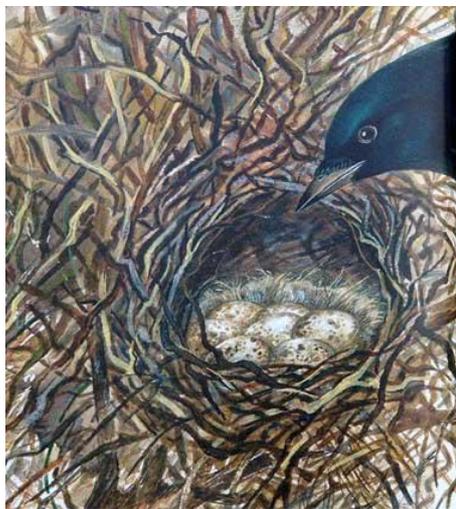
## 理屈がとおらない 田中氏のカササギの項

予想されたことですが、田中氏のカササギの項は、前の冒頭の項と、続く後のヨタ

カノ項との間にもともあつた関連が断ち切られ、孤立していて、矛盾した言葉やフレーズが目立ちます。そのため、読めば読むほどわからなくなりそうです。

「ほらカササギの巢がそうでしょう？丸太小屋をつくるように枯れ枝を組んでつくった家です」といいますが、冒頭の一節では、家を造るには道具を使つと書き、絵には釘まで描いたではありませんか？

この家には丸太小屋は含まれないのでしょうか。それとも、丸太小屋だけはやはり斧で材をきざんで、釘を使わずに積み重ねてつくるのでしょうか。だとしたら、扉の絵の丸太小屋風の家は何なのでしょう。



『どつぐはなくても』のカササギの巢の絵（部分）巢をのぞいてみましよう、と本文にあります。が、現実の場面で巢をのぞくにはよほど近づかないと無理です。それともこの絵でのぞいてみることをすすめているのでしょうか。卵があつたためらわれます。

続く文章のしまりのなさはどうでしょう。

原文では「ぼく」が自らの問いをもつて、カササギの巣のつくりの要所（特徴）をしつかりとらえて、見て、丸太小屋の照応する要所と比べているのに、田中氏の「文」のピアノキと思われる説明者は、何の問題関心もなく「ちよつと・・・のぞいてみましよう」といつて、「家の真ん中に入り口があり、床には・・・」とあります。

でも、絵の巣には7個の卵でいっぱい、床は見えます。巣のつくりを見る場面の絵に、なぜ卵が描かれているのか、卵のある巣を前にして、巣のつくりの説明は変です。またなぜ、「家の真ん中に入り口」がのぞいて見る位置にあるのか、床に泥が敷かれていて、何の意味なのかは問いません（丸太小屋とくらべて意味が見えてくるのです）。「なかなかりっぱな いえですね」

でおしまいでは、ピアノキの目は節穴です。扉ページの丸太小屋風の家は、このカササギの巣と同じようにつくられているのでしょうか。釘やかすがいで止めるのではそうとはいえません。やはり「家の真ん中に入り口」があるのでしょうか。だとしたら、「家の真ん中」とは、どこでしょう。

後半は脈絡なく、「道具を使わないで家をつくるなんてたいへん」と、話が飛びます。おそらく田中氏は、原作の主人公が鳥に並々ならぬ関心をよせ、自然を理解できた手応えから一気に鳥を手助けしなければ、と思い定めた心の動きを理解できなかったのでしょうか。

それにしてもこのように当たり障りのない文章に改変して、どこがいいのか、と疑

問に思います。それにくり返しになります。が、「手も使わず」という重要なフレーズを省いているために（その他、何の理由も示していないために）「たいへん」といつても、読者には実感のない話になってしまつてでしょう。

続くヨタカの項は、斧を手に鳥の巣作りを助けにでた「ぼく」が出会つた最初の鳥につけての話です。ヨタカは地面にお腹をつけて伏していました。「ぼく」はカササギの巣を見て、基本的なつくりが丸太小屋と同じであることを知りましたが、ヨタカとの出会いで、人と鳥の「家」についての法則のあらわれ方は種によって違つたと理解します。

### ヨタカの項 私の試訳

草地のでっぱり間にヨタカが地面におなかをつけてとまっています。ぼくはかけよつて、いいました。

「ヨタカさん。手とオノがなくては巣づくりが大変でしょう？」

ヨタカが答えました。

「いえいえ、なんともありませんよ。何しろ私は巣をつくりませんから。どんなところで卵をあたためているか、見せてあげましょう。ほら！」

ヨタカがふわりと飛び上がると、小さな窪みが見えて、そこに美しい大理石もようの卵が二つ並んでいました。

ぼくは心のなかで、そうかヨタカは手もオ

ノもいらぬね。うまくくらしている、といいました。そして、次の所へ走りましました。

### ヨタカの項 田中氏の「文」

じめんの くぼみに ヨタカが すわつています。ヨタカさん！ どうぐを つかわないで いえを つくるのは たいへん でしょう？

すると ヨタカが いいました。

「わたしは いえなど つくらんよ！ ほら じめんの うえで たまごを だいて いるだけさ」 ヨタカが とびあがると くぼみには たまごが ふたつ ありました。だいいせきのもようをした きれいな たまごです。ヨタカには いえなど いらないようです。それなら どうぐも いらないでしょう。

### ヨタカのスマートな巣にであつ

ピアノキの原文では、草地の地面にとまつているヨタカをみつけた「ぼく」は、巣をまだ作っていない、ととつさに判断しました。そして、「オノがなくては巣づくりが大変でしょう？」とヨタカに声をかけます。巣らしきものが見えたらなかつたからです。すると、「巣はつくらぬ」といふので

す。意外な返事に一言もない「ぼく」に、ヨタカは親切でした。ふわりと飛び上つて、体の下にかくれていた二個の卵を見せてくれます。小さな窪みに並んだ美しい卵を見

て、「ぼく」は鮮烈な印象を受け、直感的に自然にできた地面の窪みを巣にしている、と理解します。「そうかヨタカは手もオノもいらぬね」という声にならないつぶやきに続く「うまくくらししている」は、そのような意味でしょう。

ヨタカとの出会いによって、鳥の巣とは丸太小屋の小型版のようなもの、という仮説を受け入れるには若干の修正が必要になりました。それは柔軟な頭脳によってのみ可能です。修正ができれば、まるまる仮説は間違い、と捨てることになります。

「ぼく」は種によっては、自然の窪みをうまく使って巣にしているけど、それは巧みな生き方とプラスに理解しました。同時に「手も斧も使わず」というなぞなぞのフレーズの正しさが再確認されました。自然の地形をうまく使えば、丸太小屋や巣をつくるよりいっそうスマートな家づくりになります。

## 田中氏の「文」、 鳥を知らないピアンキ？

田中氏の「文」では、「ぼく」をはぶいた矛盾が出ます。ピアンキらしき人がヨタカを見て「ヨタカさん！道具を使わないで家を作るのはいへんでしょうか？」と問いかけますが、それは「ぼく」ならばこそその質問です。ヨタカをよく知るピアンキが聞いては変です。読者に代わって知らないふりをして聞いているのかもしれないが、それでは読者は居心地がよくないし、ヨタ

カも親切にしてはくれぬでしょう。

絵との連繋もなっていない。「ヨタカが飛び上がると窪みには卵が二つありました」といいますが、絵には平らな地面に描かれてはいるだけです（『どづぐはなくても』P.11、12の見開き）。ヨタカの好みの小さな窪みとはこれ、と見せてこそ絵本です。それに原文では、ヨタカが飛び立って卵を見せてくれ、その時に「ぼく」が窪みに卵があると知ります。ところが、田中氏の文章では、最初から窪みが見えています。著者はきちんと、卵がヨタカの体の下にかくされた小さな窪みに並んでいた、と述べているのであって、事実の記述は大切です。

「わたしは、すなんて作りやしませんよ」とヨタカは言いました。

「ほら、ここで たまごを

あたためているんですよ。」

ヨタカはとびたつて

みせました。土の山の間の、

ヨタカのすわっていた

ところに、あなが

ありました。



『おのほなくとも』  
(内田莉沙子訳、『ピアンキ動物ものがたり』  
2007年、日本標準、  
に集録)のヨタカの頂  
の絵。『森のだいくさ  
ん』と同じテキストだ  
が、絵はいたやさとし  
氏による。

この頂の極めつけは、ピアンキらしき人によるまとめの文言、「ヨタカには家などいらないようです。それなら道具もいらぬいでしょう」です。田中氏が改変した文章で、原文とはかわりがないどころか、逆をいっています。

ヨタカは「巣をつくらぬ」といつただけで、巣はいらない、とは言っていない。そこで「ぼく」は微地形の活用こそスマートな家づくりだ、と解釈して、なぞなぞの問いとつなげ、物語の展開を豊かにしました。

田中氏は「家」の概念を「建物」に限定して使っているのでしょうか。この物語は家（巣）の概念を鳥の多様なくらしの現実に照らし合わせて、豊かに、普遍性のあるものにする試みです。「ヨタカには家などいらない」ではなくて、「ヨタカにとつて家（巣）とは何か」を事実に基づいて検討しています。

体にかくれるほど小さな窪みに卵が二つ並んでいたとは、窪みがヨタカにとつての卵を守る巣の大切な要素（最小限の要素）であることは明らかです。洞穴にすむ人は、それを家（ホーム）と考えてきました。ヒツジの群れを追ってくらす羊飼いは毛布にくるまってビバークするキャンプ地が家です。ヨタカがビバークするキャンプ地もまた家（ホーム）と見ていけない理由がどこにあるでしょう。

あらゆる動物に家がある、という重要な認識を最初に科学の概念として提案したのはアーネスト・T・シートンです。シート

ンは、「大地を無秩序に徘徊して生きる野生動物はいない。野生動物にも、一定の形をとる」とするまいと家（ホーム、home）があり、家を取りまく行動圏（ホームレンジ、home range）がある」と書きまじた（『北方の動物の生活史』、『Life-Histories of Northern Animals』、1906、Scribners）。

このシートンの概念によって初めて人は、家など無縁に見える大草原の野生ウマ、マスタングにも家があり、行動圏がある、と理解できるようになりました。

『北方の動物の生活史』は二巻からなる学術書ですが、この本よりずっと以前に刊行された『カランポーの王、オオカミの物語』（The King of Curumpaw: A Wolf Story、1894）やマスタングの物語『ペーシング・マスタング』（The Pacing Mustang、1898年）にも、事実の裏付けのある動物の家と行動圏についての考察が書かれています。

子どものころからシートンを愛読したピアンキは、当然、これらシートンの記述にであったでしょう。でも、『斧を持たない匠』は、主として鳥の巣と丸太小屋のつくりの関連の物語ですから、くわしくヨタカの巣について論じる余裕はありません。あまり次の話題に移りました。

にもかかわらずヨタカの巣を取り上げたのは、読者に巣づくりの一方の極端を見てもらい、巣についての考えを柔軟に、豊かにしてもらいたかったからです。カササギの小枝を組んだ巣が人の丸太小屋にあたる

としたら、洞穴かビバークのキャンプ地にあたる鳥の巣はなにか、それはヨタカの巣です。田中氏が改変した文章「ヨタカには家などいらぬようです」は、物語の文脈をこわし、ピアンキの考えに反します。（次号へ続く）

（1面からの続き）

これまでは夏沢鉱泉から夏沢峠に出て、赤岳方面を目指すのがほとんどでした。

ご存知の方も多いと思いますが、八ガ岳は南八と北八に大別できます。赤岳は南八に属し、八ガ岳山系の最高峰で2899㍎あります。硫黄岳から横岳を通って赤岳というコースが一番ポピュラーなルートです。

反対側の北八は森林限界を越えるのは天狗岳（2640㍎）だけで、その多くは樹林（森）帯です。現在はスノーシューで雪の森の散策を楽しむ人も増えてきているようです。今回の山行は、この北八を目指したのです。いわば冬の森の山歩きを楽しもうというわけです。

## 目指すは北八、天狗岳

30日の2時過ぎ、身延線と中央線を乗り継いで茅野駅に到着し、迎いの車に乗り込みました。同乗のお客は去年よりも少なくなりましたが、4人でした。

茅野の町中は雪を見ることはありませんでした。いつもの年だと屋根の上や家の影

や田圃に雪を見るのですが、それが全然ないのです。車の中から八ガ岳方面を眺めても雪は少ないように感じられます。

山道に入ると雪が出てきていつもと変わらないように見えました。途中で雪上車に乗り換えることもなく車で鉱泉に到着しました。やはり今年は積雪が少ないようです。

料金は2食付き11000円と他の山小屋より高目ですが、部屋は3人で一部屋と、他の山小屋のように大部屋に何十人というよりも待遇は良いのです。この夏沢鉱泉は鉱泉と名前が付いている通り、風呂に入ることができません。夕食は5時半からということ、その前に風呂に入ってきました。いかにも効能がありそうな赤茶けた色のお風呂でした。

相部屋の一人は、ぼくより一歳上の奈良から来た人で、3日まで4泊するのだという。後一人は、自称八十近いという、ぼくよりはるか年上で、横浜からきて、2日は箱根駅伝を箱根の山で見るのだというおじいさんで、脱帽物の元氣さです。明日は硫黄岳まで登り、硫黄岳山荘に泊まり1日に下山すると当然のごとくに喋ったのには驚きでした。

夕食には一人用の小さな鍋にイノシシ肉が入った獅子鍋や、おかずの種類も豊富でデザートまで付いていたのには、ビックリしました。

夕食後、奈良のHさんと話したら、先週もここにきて、天狗岳まで往復したそうです。そのときは烈風が吹きとても難儀した

そうです。明日ももう一度天狗まで行って引き返す予定だというので、一緒に天狗岳まで歩くことにしました。

昨晩の天気予報ではきょうは良いということだったのに、朝起きたらどんより曇っていて、夜には降雪もあり、20センチほど新雪が積もっていました。朝7時半出発、奈良のHさんをトップにして、後をついていきました。しかし、Hさんのペースが速く、ぼくはすぐに息切れがしてきました。

月に2回ほど山行しているという、Hさんのペースでは、ぼくには無理なようです。夏から秋にかけて、あまり体力作りを心掛けてこなかったのです。週一回は走っていたジョギングも、デパートの古書即売会の準備などでサボりにサボっていたのです。体力に全然自信が持てなかったのです。

そもそも今回、南八でなく、北八の森を歩こうと計画したのも、ひとえに体力に自信が無かったからです。

Hさんに先に行ってくれるように申し出たのですが、ぼくのペースに合わせてくれるというのです。そこでトップを交代して、ぼくが先頭に行くことにしました。自分のペースでユックリ歩いていると、だんだん体も慣れて一定のペースで歩けるようになってきました。

しかし、このことが後半に大きな影響が出る原因になるうとは思いませんでした。

1時間半ほどで夏沢峠に着きました。先行の二人組は硫黄岳の方向に出発していきまわっていました。風もあまりなく天候は絶好なコンディションになったようです。ぼくも数分間休憩して、左の根石岳に向かいます。

登山道はすぐに樹林帯に入り、緩やかな登りになりました。狭い登山道はトレースをはずすと膝上まで足が雪に埋まります。雪の樹林の登りを本来なら楽しみながら歩きたいのですが、ぼくは先程から足が重くなり歩行ペースがダウンして、楽しむ余裕などとてもありません。それどころか、少し進んでは一息入れ、又少し進むという具合です。後のHさんはそのつど歩くのを止めて待ってくれます。何だかぼくは申し訳なく、先に行ってくれるように再び三度申し出るのですが、「大丈夫ですから気にしないで一緒にいきましよう」と言ってくれます。

このルートは反対側からは何度か通過していますが、逆コースは今回が初めてです。ですから、ただただ楽なコースとしか記憶していません（これまでは下り坂を歩いてきたことになりました）で、ずっと登りが続くとは思いませんでした。やっと根石岳が一望できるところまで来ました。ここで樹林帯は終わり、岩のゴロゴロした登りになります。斜度も少しづつ増していき

ます。ここでアイゼンを装着することにしました。

今日は根石岳の全貌を見ることができません。根石の後には目指す天狗岳が寄り添うようにそびえています。実はこの近辺の地形を一望するのは初めてなのです。これまではガスついたり、吹雪いていたり、時ばかりで、根石岳の頂上や根石小屋を確認できたのも今回がはじめてです。それにこの根石岳は何故か八ガ岳中で一番風の強いところ。今日も強風は吹いています。雪混じりの飛礫が顔にびしびし当たることもありません。この程度の風は、ここでは穏やかと言えるのではないのでしょうか。

根石の頂上からは又暫く下って、天狗の登りにかかります。ぼくはルートを選びながら、10歩登っては立ち止まり一息入れてはまた登りのカタツムリのような歩行を繰り返します。Hさんはその度にぼくを待ってくれます。ぼくにはその親切も負担に感じるので、そんなこと言えません。

といのは、さつきからザックを下ろして岩陰で休みたいのですが、それが言い出せないのです。先程から、ぼくがHさんの後を追うかたちになっていますが、ぼくが立ち止まって休むとHさんは必ず待ってくれます。もう天狗の頂上まで10分と掛からないところまで来ています。しかし、今のぼくはその10分がとて長いのです。

(後ちよつとだけ次号に続く)